

「善をもって悪に報いる」

～実を結ぶ人生、狭い門から からし種、パン種～

使徒 7: 46 ~ 60

ステパノは最善を貫く人生を生きました。彼は使徒ではなく、使徒の働きを助ける給仕係でした。彼の人生は正しいことを言ったために石打にされて死んでしまうというものでした。私たちがステパノの立場だったらどうでしょう？

今の子どもたちにいじめに対するアンケートで、「いじめられている人を見たときにどうするか」をきいたところ、1位が「見て見ぬふりをする」、2位が「一緒にいじめる」という結果でした。ステパノの事件の時、これと同じ事が起こっていました。彼と議論して対抗することのできなかった人が、他の人々をそのかして嘘の証言をさせて捕らえ、大祭司の元に通して行ったのでした。ステパノは議会の中で、議会のメンバーの心の中にある罪を示したため、彼らの怒りを受けて殺されてしまいました。ユダヤの議員たちは自分たちが朝礼を受けてた選びの民で、生粋のユダヤ人、ダビデの子孫であり、生涯ユダヤ人として生き、どんな生き方をしても救われるのだと思っていました。しかし、これが広い門だと聖書は言っています。イエス様の目線は彼らの心に向けられていました。だから努力して狭い門を選ばないといけないと語られたのでした。

■ 思ったとおりに

神様は私たちの人生に「本当のこと」を伝えたいのです。ユダヤの議員たちはステパノに本当のことを言われました。「心と耳に朝礼を受けていない」、「いつも聖霊に逆らっている」、「父祖たちと同様に預言者を迫害し殺した」、「律法を守ったことがない」・・・と。そして彼を石打にしてしまいました。この石打にした人たちは、私たちと同じ人間です。私たちがも彼らと同じように正しいことを言われて腹を立て、あんな人いなければ良いのにと考えてしまうのです。私たちは本当のことを言われると怒ってしまいます。彼らは肉体的な朝礼を受けていましたが、心に朝礼を受けていませんでした。私たちは心に朝礼を受けているのでしょうか？本当に神の声をきいているのでしょうか？私たちは神様に地の塩、世の光となりなさいと言って選ばれました。私たちがこの世で輝いていれば、多くの人が集まって来ます。私たちが輝くべきところで輝いているか？そのために命を捨てたキリストを、その姿を見ていた神の思いを思い起こさなければなりません。神様は私たちが良い者に変えられるのを待ってくださっています。

■ ①努力して狭い門へ

第二ペテロ 1: 5~9

狭い門から入るためには信仰が必要です。信仰とは信じることを自分の心に迎えようとすることです。私たちが努力すべきことは、信じようとすることです。ステパノは自分の命が失われていく中で「これが一粒の麦になるんだ」と信じようとしてしましました。イエス様が言われた天の御国である「からし種になるのだ」と決めたのです。

努力して狭い門から入ることは私たちにとって、今までやってきたこととは違うこと、当たり前と思っていたことをもう一度考えることです。そしてその中心は「信じる行為」です。努力して信じようとする、その信仰から徳が生まれてきます。私たちが信じるようになると、相手に良いもの（徳）を与えるようになります。そして、良いもの（徳）を与えるためには知識、知恵（考える力）が必要です。知識を持つから、ただ与えるだけではないこと（自制）を知ります。自分を制するには忍耐が必要で、多くの人は我慢をしますが、それはやがて爆発します。忍耐と知識がないからです。そして忍耐には敬虔度。誰も見ていないときに一人祈ること、誰に対しても分け隔てなく接するように生きる事です。そして兄弟愛（自分に近い人への愛）とそれ以外の人への愛を加えなさいといわれています。そこに成長があるのです。努力して狭い門に入ると、この連鎖が進んでいきます。これは「狭い門に入る」という決断によるのです。

■ ②天に宝を

マタイ 6: 19~24

ある大金持ちのクリスチャンの女性が夢を見ました。彼女は自分か死んだ後に天国に行った夢を見ました。天国の通りを歩い

ていると豪邸が建ち並んでいました。その先に中流家庭の家が並んでいました。さらに先には葉っぱで囲った家があり、最後にわらの家に案内されました。彼女は天使に「なんで私はこんな家に住むことになったのか」と文句を言いました。天使は「あなたは地上で自分のためにだけ財産を使いました。だから天国の銀行の残高は0です。」と言われました。天国に宝を積むには、この地上で報いを受けないという条件があります。神様は私たちの必要をただでくださいました。主は与え主はとられる、主のみ名は誉むべきかなと言われるとおりです。右の手でしたことを左の手に気づかれないように注意しなければなりません。また、十分の一を捧げなさいと言われていました。金銭だけでなく肉体をもってそうしないといけません。農業で1割の種を取って次の年に蒔くように、私たちも得たものの1割を蒔かなければいけません。週のうちの1日は神のために捧げるのです。困っている人がいるときに手を貸すそのことが神に捧げる事です。

■ ③父の目線に

狭い門とはイエス様です。イエス様の狭い門を見つけなければいけません。どうすれば良いか、それは父の目線になることです。神様がどうやって人々を導いているか、知らなければなりません。神様はアブラハムにどのように関わったのでしょうか。神様はアブラハムが自分からイサクを捧げるように、ロトのために祈るように育てました。父の目線とはどのようなものでしょうか。

■ 「橋」という実話より

ある男がいて・・・彼にはすごく愛している息子がいました。その男は電車が通る橋の操作員でした・・・息子は電車を見るのが大好きでした・・・その電車にいる人たちのことも・・・孤独な人・・・心に怒りを持っている人・・・プライドか高い人・・・希望を失った人・・・麻薬中毒者・・・

しかし、悲劇的なミスが・・・彼を考えられない選択に導いたのです・・・電車の人たちを全員死なせるか・・・レバーを引いて、自分の子どもを橋に押しつぶされるようにするか・・・全員の救いには、最も愛された”一人”の犠牲を必要とした・・・”一人”の犠牲が・・・未来に希望を与えた・・・神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。(ヨハネ 3章 16節)

神様がどんな思いであなたに犠牲をはらったか、それを知ってほしいのです。怒っている人、孤独な人、疲れている人たち・・・彼らはあの電車の中でまさかそんな犠牲がはらわれていたかを知りませんでした。あなたの人生には犠牲がはらわれているのです。そして父の目線とは、そんな自分勝手に生きてる人たちへ最大の愛をもって向かっています。”一人”の犠牲はひとりの人の人生を変えるのです。

人がその友のためにいのちを捨てるという、これよりも大きな愛はだれも持っていません。(ヨハネ 15章 13節)

橋の操作員がどんな思いでレバーを引いたのでしょうか。そうしない選択もできました。神様はあなたのために一人子を与える決断をしました。もう一度、目を開いて自分の生き方に目を向けてみましょう。神様が代わりに犠牲をはらってくださいました。私たちは列車もろとも命を失う人生だったのです。代わりに犠牲をはらってくださった方がいたので、命を得たのです。

ステパノは「主よ、この罪を彼らに負わせないでください。」そう祈って、自分を石打にする人々を赦して愛しました。

愛することのために命を捨てる、これが神の真理です。自分のために生きるのを置いて、イエス様のために生きましよう。

(要約者:日名 洋)

(2018年6月3日)